

情報活用の実践力の育成を目指した授業開発

- 「書く」活動を通して -

学籍番号 189970

氏名 光田匠

主指導教員 佐々木靖

1. 背景と目的

近年の急速な情報化の進展により、高度情報化社会を迎えた私たちの身の回りには情報機器が普及し、情報とは多種多様な形で常につながり続ける生活のツールの1つとなっている。そして、子どもを含む誰もが情報の受け手だけではなく、送り手としての役割も担うようになってきている。このような社会の背景に伴い、文部科学省（2017）は新学習指導要領において「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的資質」である情報活用能力を「学習の基盤となる資質・能力」の1つとして明記している。一方、児童生徒の情報活用能力について把握、分析するとともに、指導の改善、充実に資するために実施された情報活用能力調査（2015）では、「複数のウェブページから目的に応じて、特定の情報を見つけ出し、関連付けること」と「情報を整理し、解釈することや受け手の状況に応じて情報発信すること」に課題があることが分かっている。また、情報活用能力を育成する授業の実施率が低いということも指摘されている。

本実践研究では、情報活用能力といっても幅が広いので、その観点1つである「情報活用の実践力」を取り上げる。「情報活用の実践力」を育成する授業に必要なことは何なのか。このことについて1つでも多くのことに言及することを本実践研究の目的とした。

2. 実践研究

実習校の子どもたちの実態把握と信頼関係形成に努めた実践研究Ⅰと授業を設計・実践する上で大切なことを学ぶことのできた実践研究Ⅱを踏まえ、実践研究Ⅲでは「資料の比較」、「文章を図や表に比較」、「多くの資料を集めて調べる」といった部分に課題が見られることが分かった。また、情報活用能力に育成においては、子どもの主体性を授業の中で引き出すかが重要であることが分かった。

実践研究Ⅳではさらにこれらのことを踏まえて、教科等横断的な視点を取り入れて授業実践を行なった。そこからは、教科間の学習内容と目標の結びつきの弱い教科横断はむしろ逆効果になりうるということが分かった。「情報を読み取る力」に関する意識と「情報を表現する力」に

関する意識に関して質問紙調査を行ったところ、教科等横断的な視点を取り入れた群に対して、教科横断的な視点を取り入れなかった群に有意差が見られたのである。また、同調査において「情報を整理する力」に関する意識を調査したところ、事前調査の段階ですでに群間に明確な有意差が見られたことから普段の授業によって差が開きやすい項目であることが示唆できた。

3. 総合考察

本実践研究では、情報活用の実践力の育成において、教科間の学習内容と目標の結びつきの弱い教科横断ではむしろ逆効果になることが分かった。ただし、ここでは教科等横断的な視点をどのように結びつければ効果が出るのかといったことまでは言及できていない。今後はそのことに関して実践研究を進めていきたい。

また、「情報を整理する力」に関する意識は、本実践研究における質問紙調査の中で唯一授業を実施する前から学級間で明確に差の見られる項目であった。このことは、普段の授業によって授業者が意識しているかどうかによって他の項目よりも差が開きやすい項目があるということを示唆することができる。この示唆は同時に、情報活用の実践力の中でも特に重点的に意識しなければ各教科の目標を達成しているだけでは不十分であると言えるだろう。今後はこのような、重点的に授業者が意識する必要のある項目についても見つけていきたい。